

小笠原島紀事

卷之廿八

三十

W243  
9

共 三 冊	一 冊	四 七 番	四 門	館 利 漢
-------------	--------	-------------	--------	-------------

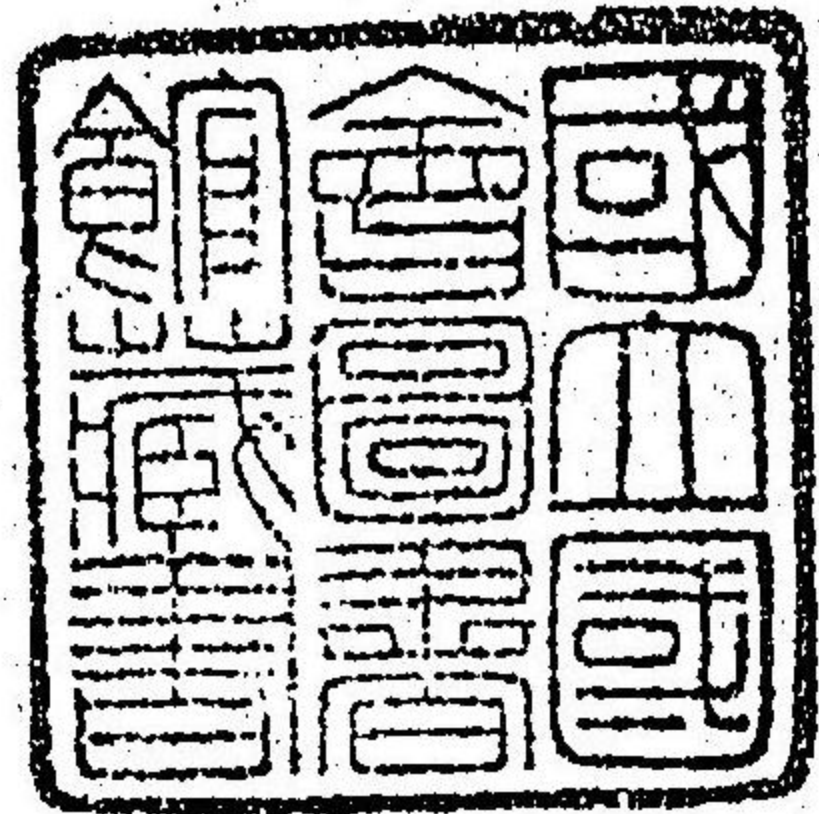
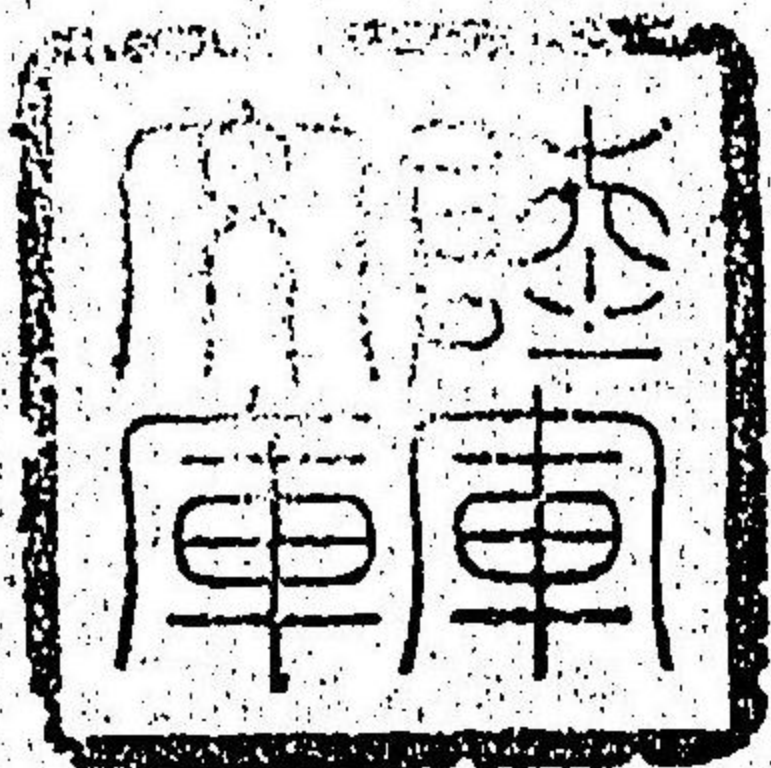
陸軍文庫  
和  
第一五五番  
共三冊

W243  
9

小笠原島紀支卷之二十八

目錄

- 無人島漂流記
- 醉翁無人島問答



無人島漂流記

元禄九丙子年日向志布志船頭勝丸工門已下五人

鳥島へ漂流翌年帰来の抄

去年子十一月二日志布志船主孫三丸工門より船頭勝丸工  
門五枚帆壹艘一宗組麻見島を出帆して山川港へ舩掛り  
し日四日所を出帆し内の浦の地<sup>日向</sup>大寄の洋港程程走り  
出せし處五つ時夜不東の方より西へ飛物以多し心許さ  
く思ひしに俄に西風烈く吹出し夜明多て四方を見むと  
山島ふとも見へに十一月五日より七日までおれ多る  
に七日四つ時分より北風甚しく吹あも翌日十一日所  
にわえらき日夜十日走りけるに廿一日海となり櫓をた  
て押行ふ大さ四舟も何れも<sup>さ</sup>蟻龜壹の魚を何つぬ船の

航口の下子頭を出し船を漕ぎ出せりし故船頭藤丸  
新門亀三むらひ何處の方子船を向者たふは島をかとり  
不付可申哉とし一候と望みひらき上龜東の方子頭を  
向者三交程着と返呈上者お示したるやふたむしりてぬ  
を東の方子出所地島をたふす魚しと三たひ龜をぬりける  
龜に程なく見えにかりよき其夜五ツ時より又大西吹  
出し十一月廿一日より十二月廿四日まで日数三十四日  
同風にて洋中一揚を有るなり此頃の鬼難いひひと  
の物大島島へ控着しあるさて程を八巻かゝりある凡  
そ山川を出帆せしより日数五十四日同なり夜の本にて  
初ハ島とも瀬とも又ハわらひ只かひ多しくぬり  
少くぬり多し故か程多しと思ひ形多し程明りたに島

を望み見れし島の中程より下之方を一面は白く雪の海  
を積りたるやうなふたし起雪なり其峰も皆白りる處き  
みせみふりく近寄りて見てけきと白かきしハ白き島  
のひとくとま呈集りくうきぬる其島の多し呈きて  
島際波高く崖峻しして船の繁き揚をか流き着てより  
翌年丑正月六日まで日数十日空しく本船二位着して  
やかうと思ひ煩ふ其中の糧をてハ玄米斗赤米五斗唐  
いも系小銀子七十目小豆四斗糖七斤かとりて名取し  
正月元日けふふそぬりたといつての如く年の首めか  
とおせ祝ひぬるに中て僅に米十粒つてをいぬ、地唐い  
をを切りたニ々切つ、を函堅めと名はけて餘りける即  
て糶之し希き釣をたし魚も釣ぬるに多くを運ぶ

りけりちをとり得るは、海のものありける板に月六日や  
うくよして船を岩間に打つけしに浪荒して本船破損し  
ぬ水は三人職に飛せりぬをるを人々船頭と共に乗りぬ  
て船中の苦物大に大陸に運ひ阿市橋船と名に引上たりせ  
の海岸より岩石高く聳へ或は高さ三四丈の處而已にて  
せよ一きやふかく本船の板をさつし材に他り崖の修き  
如我見て漸く止によち阿市ぬきむはあしの平地阿る  
二間の板類を舟祖とつ、木屋のやうな志つうへてまつ  
位者をも直し並山に米と方言多し是を毎日こ、頭子  
囊わうのものをさわけちきりとり食事せはけきと山の岩  
角はるとく蹴めてを皮を破りしま、徳なとを解き草履  
を他り岩石をよち登りぬ板島中、湖類の木波疏の木

こみて大木曾てなく予よまたきあいのむらう蓋磔紫山芥の類あり又た  
船のまきもたを刺さこれ毛ふかきし香み哉

一島の音さ拾八九町もふり廻りおと里餘も阿るへしむ  
あし人の巨舟子てもいれせしと見へし處三所阿る石  
板かと築き又を岩穴子物み或ハ油火をせもしぬるや  
りの処も阿里又た切板まね板の阿里て其處にて大鳥  
の骨かと毎敷のふりたりおきを鳥をおけし候へたる  
うとおそむる

一鳥を右の大鳥又た鳥鴛鶴鷓鴣かふてハをふは山中極  
体大鳥にちくて是のぬき處もかくかも人をかそきに  
却て人を追ひ是より人いつき裳をよび引かといそ人  
も身もいつ地をちりて越越き處もかく鳥の上ハ鳥

いやまうて何りぬる等々長き六七寸嘴と肥かしくこ  
み口甚た廣く豆は蹠何り鳴きいかにといひぬ鳥も鳩  
ほとにして鳴声も細く鶯も夢ちいさしね大鳥は死ぬ  
る交三々所々窮る何りて其命子てと死し多る跡とか  
し

一米にても正月七日より二月二日迄も空りくくらひし  
ふともとや株をしぬる程に一日は一羽か育つてさつ  
そり孫其の中右の大鳥子成産をたて子飼ふ餌子く己  
せん多めに諸の魚を己へ来るの候まで地よおとし  
多ふて写す様いなり食を以多しける大かたハ鳥賊魚  
禿魚ハヤシ賊魚かとの類めて鳥孝羽子数多し育てに一羽  
は子き何の生立其卵の大さ廻り一尺斗は餌飼の時

左記鳥の味よりおし嘴より人子鳥の嘴よりつし人  
己る時寸子多此嘴よりけねにして地よ為としと親  
も子もく己に又大鳥より胸大きく又えたるをハ林  
よて多。肥お餌を出し扱たといひるけぬま其多魚  
或は餘の肉の切を二つも三つも吐き出しぬるを是  
とも指ひなり食ういぬ又た雄多と又えたる脊筋黒く  
一入人を述ひ食付かといふぬしぬ右の餌飼よおとし  
は老の如き鳥賊の四五尺許も何ふへき又ハ飛多し計  
尺二三寸より下りさゆものなり

一 出水おしもかく丸く矢水をもけ飲料とせ若し雨降り  
さふ時をぬを剪し水とかし又ハ蓋の根を止はふり場  
高のき孩

一子鳥既ニ生ひ立ちをた殺奪の爲し體をよくらけ枯ひ  
 殘積不と云居體もなく那も此不能にをちや親を殺  
 し食ふべきやいひかこいぬきとも各申あふも我言  
 可家の命もあふ何とといひ甲斐なき事あふも悔して  
 今更て鳥の腹にて命代助ありたる子たとひ飢多を左  
 とて今さら命代殺をへしやとて飛岩をとをちを食  
 し山簾敷を枯ひておし 飢を凌ぎぬきとも大かた腹  
 痛とせま下し夜へを録の白ぬとも不申棟の物あきも  
 奪の爲し九子を有里煮しぬれは深け又と火不何ぬり  
 て油のあくとくあふを凌ぎへて腹痛と止し申あふ是か  
 と云お付けあふ時も古の油を清きたといえ申心  
 一二月十五日より破損をし本船の板を有里檣舟のとも

に長さ七尺余かとの他り統きさいたしお長さ五尺と  
 ありの舟も他五立ト  
 一衣類も波風雨水に何ふて多く破き魚卵を充角して打  
 器つ、物をたふ、又元より香梅も掛けきて置て釣り  
 物を取時も何里々取物を毎なぬしきは大船何とを  
 アギナミといふ魚を碇止ことき上げ近の寄せふかと  
 に岩の上より釣を以て引き何け食子何てあけよ又た  
 拾ひ取免たふ魚を火子何ふり又十日乾し節のやうよ  
 めしうへかとしつゝ大船六七日の食料を用盡し順風  
 月和を待つ舟子豊二月廿五日といふ子洋中停泊りて  
 日和を待つ程に片か、此船り立舟も亦余多て取らん  
 と大社、誓形をあらじ日本の方代ぬしおみ親子書

子下、再び何とせぬふとも又九悔底の水層かきしめ  
玉ふとも天道子包せ奉るといふ五人共子今を限り  
の事なれは洞ふむせいで確に平伏古次、あゝ島の  
地神を祀ねし又た今日あて我等を救ひ人をたす免く  
又ありとて大島から相し遂に二月廿五日の辰四ツ  
時ともて彼島を出船し向方と定免て押し出せ凡そ左  
島の目録七十九日なりしかる子かの大島とも駭しく  
深に下れ下り海に浮い出て我く、出船を遂り又も名  
残におしぬふさ振て鳴響き舟を祀へ飛たつも何  
至五六日の宵をかひあ、く船を遂に来し、其後  
四尺洋舟をまかきに送り来ふ其情やさしく覚ゆ  
船も凡そ任せ浪にかりき打かると三月五日の辰四

ツ、時分より遠に國の河尻といふ地子悔を著きたり  
此處まで舟を任せ浪に送り来りし大島も何れ飛去る  
浪と三たびまて伏せをのみぬ

一かの島を出船をしまり三日免に島をツを見おたり能  
り大からに草木もなく岩山にて後

又た其後六日めと申子又々島一ツ免たり、其を耕  
化よてもいたせしと思ふかあがりあ、子有り佐あ人  
と働きしりとも波風何らくして寄せ難く昼夜十一日  
の宵も沖中よひた流きよかゝきて其宵も大浪い  
たひも船もあひみ今を限と思ふ事数高らに既三日  
め、火もあつた六日めより食物も尽きてて魚れハ  
船頭勝左衛門小中着の中、米一トたゝみ斗量嗜之



九子を今と限りの名跡とおし以た、祀各孫一に其位  
七水食とし一白狼不申并

一 三月五日川尻一流暑甚前在勝左束門申とぬしきに茶  
を以て香にたしぬをいふはるもの子誓ふ不ふり  
人疲きてて氣せうとく物に迷ふ各をいふ、子  
誓ひの誓子案かとの香い思ひもよとに申す志き、  
誓ひ案の香い多しけ持後子宿元子孫に此物語をぬし  
誓を客元にて三月四日子左孫左束門の誓子とも父  
吏の君日よして自向をい多しせし事ありし堂うや  
、ふたぐいの事いふらも何事とあ、よと誓しぬ  
一 我、遠に西に居した持事代友一お遣しは役人方一  
已た里礼の上お脚をいにて江戸へ申送り持此百の事か

、里しるを江戸内を敷上り祭馬衣旅訪甚九束門横目  
ふか敷左束門不拂方福島甚五々情呈程兩人遠に必  
余りき我り五人を請ふり吏より東海道往未筋へ出我  
度折節 左守様内下周の付にて水本亭内用人土山権  
九束門を以て微細に守召上り表三月廿三日伏見まで  
内供に召連四月十八日麻見島へ帰着し同く廿三日左  
海立布志へ帰着し多り遠江五子て内より下にお有  
一 漂海宗人又の若者廿般既去布志の務左束門三十八筆水  
之志布志の情左束門五十七筆曰志布志の休次右束門  
四十筆曰志布志の七十郎二十四筆曰波見濱の五郎九  
束門二十筆以上五人なり  
一 志布志町を子般之山下跡三左束門を右に五人の毛の

とも行悔知もさるに極り甚不便ありて五人は家内共  
我介抱以多し重追善の多めとして下人下女などに身代  
銀などあつせ其外旅宿行脚等の者ともに衣食の料も  
何たひて五人の冥福成いのり者ゆ又たお老よりけき  
獵師梅庵を捕へ殺さんととしをとお直之僧成とて  
その名を悔へ放しあとし事一二をかりにけきと五  
人之者とも無の直護を悔て恙なく悔罪しよるを  
誓程の熱きを遂させ其責を弥三た勇門より出し下人  
波見の五郎左衛門は右代銀た勿論刀衣料などあつ  
一宿女へ暇を人毛種こ心成つけ扶助し者あなり

元禄十年丁丑五月十八日

寛政九年乙未島より帰着者三艘之者共之記

土分鏡郡赤置浦松尾儀七船四人系りにて天  
正五年乙未島、漂流仕ニ々年の内三人病  
死い多し一人お残り十三々年島ニ死在此  
一曰帰玉に哉

持分大坂小堀江龜次郎船十人系りにて天  
明七未年然後新撰より清津米を積こ江乃へ  
相廻し再び江乃より仙臺に西地米積然こ系  
らんとせし途大坂の鼻より漂流致し翌申年  
無人島へ漂着仕成亥亥年之内系祖三人病死  
以たし九人お残り十々年在留致し此を海  
仕哉

薩分領日向三布志浦中山屋三右衛門加六人

余りにて寛政元酉年標流仕翌年無人島へ  
標着仕五年迄二人病死仕四人お弥里ハケ  
年互島飛互い交侮仕故

松共標流且つ無人島より帰着之次第

松共標流仕無人島凡そ高さ十七八町島の廻り云里  
程も可有之哉と考申共山取り志中高く東西かし終  
し六七合目・中握有之丈より山三つに分巻小より南  
へ打通し各斗々所有之凡そ長サ四五町程も有之哉と  
お見へ申し平迎・と大島崎尋致者申共北の方を尻何  
り差接し四五十町程深さ斗十町余りも有之哉其各凡  
て萱系にて中に蔓・生木有之哉是を木方にて豆娘  
と申木・似たる様子小南の方へ行つめにて同様の

穴何里木系同様・生ひ茂りかし中狭く見へ共古穴上  
り難處と東之方へ下り扱へとも右に木立有之處は産状  
此水必地にて一ツさき分申木・多く似申共此木の皮  
とをき礎綱細物等其外にも此交仕立お用ひ申共木の  
高し凡そ六尺五寸限りに両す小島の廻り・越作岩山嶮  
阻みて東の方四五町程石嶮有之丈より西の方三町  
余石嶮にて入江の極なる處有之に其處上之処足にて  
以て立申共所々に菜萁の水有之乎も萱大萁七草類  
魚・水虫川大萁を干扱てたまにお用ひ申共古と山  
上り岩嶮をよて登り難き・付松共上り扱毎之哉  
一松共位居仕小嶮を初東向之岩穴三つ有之哉・付丈と  
扱へ盡し又た新穴三つ補理五六尺四方の穴に五人三

人四人位又て住居仕川右住居之所より五六町余東之  
方にて小船打立申共此島出地よりも至て暖氣は生  
川

一食物は鳥魚貝類蔓菜等も潮にて煮又て焼下て食食子  
以たし煮物とし是も根山より出之煮採り等も以て割  
合を日々夫食とれ物ひた水も出水毎之天水も涌免我  
二岩穴の前に池成堀里貝売にて志つくひも作り塗里  
堅丸涌垂申共堀共早之岸も交り水切巻にも半粒後仕  
候

一衣類古暖氣之島故草物綿袴等にてお清き衣に玉巻衣  
鳥羽にて裏のふとくふしり入着用仕お凌ぎ共  
一島に方三川魚鳥貝類等多かふに共大島お巻も魚加白

く羽根に黒き所少し有之大き兩羽と用きし物も凡そ  
七八尺も有之に此島人も遠く不申共故に岩間へ逃結  
め梅にて折殺し夫食に此共此島五月既より八月既ま  
て何れへ鳥里候共一向居不申し近所へ人も思毛容易  
に捕盡不申甚骨お申しその他にて見馴不申共青島に  
て承里の増類白飯と申鳥のよし兼里申し古島より油  
ととり穴の内て燈してお用申し鷺目白八年中有之川  
一鴨乙女と年々よりお後り共義者之川乙女八年一四  
五日の間のに後り来り共鳥芝左初廿し有之川所およ  
りお後り共共又へ島にて生立川共近所を鴨お後り来り  
住居之穴へ来り食物等を取り一向人を怖毛不申防ぎ  
方々難儀仕川糧へお生川

さ、魚鏡赤魚等方之いさ、魚を西地にて見馴書不申  
色里く取綱に似て長尺式三寸より七八寸まで有之鏡  
左西地日標にて大小両宜川赤魚左西地のかさぶに似  
申川右奥取とハ木の皮細拘の切巻等にて釣糸を止し  
上へ坪の日成見合せ釣上糸夫毎に仕共取共際際玉而  
言く荒埃子へ釣巻兼漸く一日に式三枚終く釣巻日  
と六七枚位は釣止糸申川無左将山に有之川は共捕多  
存し不申及全と書之ハ故釣巻縄一つけ其の甲子魚て  
在島中漸く式三枚石已期にて養食事仕川貝取ハハ  
トと貝志、み見と申とて細の貝有之将と見合せ  
拾ひと聖廟に焚き夫食仕川此外魚鳥取一切見あり  
不申ハ

一私共在島中右島へ漂着船並に漂流之船等一切見あり  
不申共先手遠か舟一艘右島へ漂着のよし外に江戶監  
町宮本善八船隻艘元文三年正月漂着之趣古斗被ハ書  
置き岩穴之内ニ板ニ書施し有之板ニ付船既岩ハノ積  
せ板腐数年土ニつき板腐り字性お分り不申我ににお  
見へ板生後薩摩船と既果右兼門ニよませ共藩古同板  
ニも有之哉と申共右島に先年人垣共板子ハ岩穴の  
内ニ鵜釜の類々お見ハ縁の人さり有之共かた方慥ニ  
左お分り不申共外之岩穴中ニ人を葬共体ニ骨老人  
分有之共又た外岩穴ニ病氣にて臥共俟共果共体の死  
骨一人分有之共右之外所ニお尋共板とモ死骨一切見  
あり不申共

一私共糸組之内七人遊、病死仕哉、甘其節お意の地所  
見立仲買とも寄合葉王墓石に俗名彫り付建置哉

一蠅夥有之食事にても跋し其節、一面に飛つて容易  
く食ふふお茶椀ニ哉

一蚊も夥有之哉是、山蚊とも可申哉此地の故より左  
大きなる類にて昼飛とも穴の内お言、志むらんも其  
其事、お茶ふ申哉外ニ若哉るも火とせぬし哉る、  
有らぬりふ申にて難仕哉

一此夜私共糸り祖お後り哉小船お立と義たニ申上哉此  
後三艘糸之者廿数年お立其内遊、病死之者有之拾四  
人お残り、昼お救生而已ニて病命お助り存仕其節日  
之艱難言語を述べし哉事故お寄りお歎き其内存身哉

如此難仕し余助り存仕其節もいつの世子お地お々  
板子集る便りも無之此通にてお後々余教お居き此島  
にて枯果おより外無之心外之至りニ其平日神仙へ祈  
願仕哉も何卒日本へ今一交お後り親子兄弟へ對面の  
之お願お然る海薩お船ニて碇寄棹綱お投鑿三挺等お  
回リ金遣ッ山刀尾丁槍杖や由り打ッッ服差吉勝お上  
け置お向是よりお寄り木寄り願等を指ひ集免いお板ニ  
も小船お打立お来おて運哉天に任せ此島を糸出し運  
ニ恨み佛神のお加護を以て地方へお付親子兄弟お面  
にお多し哉い、誅ニ大願成就難有きお事なり若又運  
如何様ニ奉りお共迎も枯果て申命かも思ひ残り其事  
無之やと各申合せ其所何事も同心一歩仕お依之種

申合也我故共力一鉦治無之我而也釘出未不申我故也  
十四人之内鉦治心得我者遠人も無之海休七ト申者國  
地ニテ隣衆ニ鉦治有之朝夕見交ハ寫以ハ板ニモ素齋  
立我海可也ニ出来ハ寫石モ隣友に以無し斧も鉦ニ以  
たし不足の道具を造リ出せリ釘板造板釘メ造本釘鑿  
造板鉦造板造板乃ニ鉦造本墨壺造ッ仕立上よ  
り寫本を心懸ル海友ハ板ニモ可お水造本寫ハニ付  
天ニ興ハと不立け船亦立ニお魚リ我所船之亦立方我  
存し我者遠人も無之ニ付申合荒にて船取を造リ夫也  
年中ニ以無し長サ三尺程の木ニテ船を亦立釘の亦立  
方我試ニハ書より地處を見立小船亦立ニ無魚ハ我博

共寄大を隔てる仕立我故別て儼取リ不申三ヶ年全相  
急リ漸く成就仕ル處右船亦立我場所より濱辺までの  
間幾所にて容易に船取しかたく寫夫より道普請に取  
懸る土石の處切通し岩寫等ハ道を付け數日お掛リ漸  
道普請出来仕我尤人カ多く相掛リ我博者道も早く片  
付可申我故共夫食を相働き我寫ニ不ハたし我博者存  
外日數相掛リ申カ板手本ニ致我船ニ書置き相添ハ岩  
穴の内ニ丈夫ニ入置以後漂着者有之我ハ力にも可  
相成哉ト生島中の様子夫食並ニ小船亦立出帆の趣奉  
しく書ニ記し申我夫より日和現合セ出帆可仕ハ船中  
飯料ト鳥ハ子物魚ハ干物等用意致し水樽四ツ仕立  
天水を入去用意相調ハ我所ニ艘乘リ合共ニ磁石登之

方角不相分矣二月致方かく日の出故を以て相考西北  
を心當ニ南凡を相待矣所南日和子相成矣間一統神仏  
を祈望出帆任り追風ニて昼八里程も走り夜と覺へ右  
之島蔭見へ隱き其外島山等一切無之夫より方角不  
相分凡子任せて五日走り夜五日<sup>月</sup>夕方ニ相成り島山  
見料サ一統カを待右島を心當ニ走至矣所翌六日月昼  
四ツ時頃着船仕矣島之役人出會何里て櫓り出せ話  
を以て小船をも濱揚以多し和共も無難に上陸仕り相  
尋矣所春々島の由兼り誠ニ歡ひ餘里ニ皆々落候仕り  
年月兼り其所寛政九年六月十三日の由新申す故九  
矣母者和共無人島を出帆せしハ六月八日ニ出空矣夫  
より春々島ニ出帆を以て通届仕候在夜所七月八日

日和直委故出帆相願故所水夫兩人出添被下都合指  
六人乗り組七月八日朝五ツ時春々島出帆以多し夜ニ  
以凡等互委同日八ツ時ハ文島ハ重根濱へ着船仕ル所  
役人中より時尋ニ付成行有候之通至申上矣伯右時役  
人中浪迎へ出出候所計を以て小船を陸上為ニ被下  
休礼之上和共雜具等所改之上早速旅宿被 作付事  
毎差支未出抱被下尚又被 作付事ハ便船次亦江乃  
表ハ時差出し可被下旨 作付事甚々難有存候



八丈島送り状

当七月八日昼八時半時辰八丈島大槩方沖子ニあり小船  
三隻相見え一舟ニ舟早速人且召連き壞一舟上其所右  
小船大槩御八重根津呂一致入船其ニ舟相尋候所出公  
鏡即赤出浦松屋俊七船模公大坂北堀江無次郎船薩公  
志布志浦中山屋三右衛門船右三艘糸リ之者共無人島  
一被漂着彼島ニて船を補理し拾四人乗リ組致出帆其  
所春々島へ着いたし右島より水夫之者兩人乗組都合  
拾六人乗組八丈島へ着船ニよし申長間上陸为致子速  
休宿申付致人抱漂流之始末相尋口書之ヲ寫し

薩公志布志浦中山屋三右衛門船

沖船頭

栄 右衛門 申口

水主

三人

私共倭八ヶ年已前無人島へ漂着数年在島仕り補理船  
亦立八丈島へ着船仕共始末迄ニ可申上旨内尋ニ付左  
ニ申上候

一私共倭八ヶ年已前無人島へ漂着数年在島仕り補理船  
船頭栄右衛門水主共五人乗ニ而寛政元酉年十月二十  
五日志布志浦出帆仕里傍中玉島へ日十一月二日着  
船仕り運賃請ニ而操船積入薩分へ帰帆可仕所水主之  
内兩人病氣之者有之船中手廻り不申候ニ付日所ニ而

重次郎、申者相屋都合六人乗り組日十一月十五日玉  
島出帆候多し日十一月二十六日日向国細島にて孫越  
日月二十八日東風にて日和匠委我写出帆仕共所日北  
日向灘之内にて候ニ孫朱我母共以行き悪哉拾里餘も  
沖へ引出たき翌二十九日大西風兩時化ニ孫朱り地方  
見失ひ向方も不相分無為方津ふせ走りニ仕里孫在翌  
三十日ニ相成凍浪風荒く船難持致ニ母櫓を伐り誓り  
を拂ひ心願仕りたりし綱を引ふせとも走りニ孫朱何  
方ともなく慄尻仕里孫在我夫より波風志俤まり俤ハ  
倭も味生ハ母共飯米居一切毒水一切毒味生没斗リニ  
而十日余り難候仕り母共一向島山等見掛不申翌戌年  
正月二十九日相覚へ島山又魚ハニ生力我母船へ破

と立川嶋共海深くして相立不申候故本船乗捨て解に  
て右島へ取附き磯辺に寄せ船を繋ぎしととも荒磯に  
船指し所陸より人乗り舟共引揚げたる船の小道具等  
廿二反上げ漸く陸へ向かり右の人こゝに居る所大阪  
北堀江龜次郎船出か際着の者こよし兼り川吏より右  
島の板子兼り一曰に相成り莫島斗王食物を以てし為  
令お助り我在し然る處、水立魚右舟内事船中之難儀  
に負打仕り其上持病之麻氣さし兼りお頼ひし共兼  
鳥之外食事等々之し写養生ふお叶日年六月二十四日  
々寛一川日病死仕し日善助俊も是又惣古束門曰板  
頼ひ丑年七月二十九日と寛川日病死仕し右兩人之者  
共死去之節俗名石に彫生福と兼りし可へ建立申し

一三艘乗り之者共一所に我在し所へ皆にお詫仕し川連  
も夫食米に水も無之場所に任所ししか只助命いたす  
のこゝて存命に於し甲斐もかくし写し候にてお果し  
よりも萬一國地へ無事着ても可致哉各一命を神力に任  
せ幸ひ銘記枚鑿三挺斧斗挺回りの手槍ッ銃斗枚山カ  
庖丁槍枚や此里お走キッ古服差槍銃枚、用立不  
申し槍共は道具を以て寄木よても有之し故に小船造  
艘造り立日和を見合せし島を出帆可致と皆にお詫仕  
着仕し写ぬいおを仕立釘枚槍斗槍斗槍鑿槍挺  
鉄鏈造挺庖丁槍枚標鏡造中墨壺造ッ出来い多しし写  
凡そ三年祀も廻り小船立日和見合せ我在し内南風  
々寛一節出帆仕何とも甘く波風に任せ走り申し所

五日、島山見掛ト留船中一日力を右之島山を心  
急ぎ走り寄リ申ル所翌日昼四時着船仕ル右島より  
島案内被下上陸仕兼リル所春々島由兼リ申矣年月  
を兼リ候也を寛政九巳年六月十三日之由右春々島に  
て舟女抱を請者尚七月八日迄死在ル所日和一本半ト  
男出帆仕交旨春々島中役人中へ相願候所在ルソ、尚  
島より水夫のものを糸船之世可申被 作長則ち春々  
島より水夫として糸組以たさ都令拾六人糸組七月  
八日朝五時春々島を出帆同日昼八時半時八丈島へ  
着船仕ル所早速御役人尻中懐込へ舟出程々舟手既リ  
被成下補理船陸上へ被成下私共諸道具衣類等改め  
相帰漂流在島之様子 尚尋之上旅宿被作舟兼事堂差

支内舟被成下以上便船次方江戸表へ舟差出し可被  
下皆被作候事、粗有仕合ニ事存ル  
右之通り船とも漂流并ニ右島中在令之始末申しも古  
速無内申し依之口書連承差上申ル以上

薩州去布去埔

中山尾三右衛門船

生國薩摩國

八五郎

三十九歳

寛政九巳年七月

京旨禪宗

生國日向國

重次郎

五十三歳

京旨禪宗

宗吉禪宗

生國日向國  
紀仁

甚古樹門

當己 五十八年

宗吉禪宗

生國薩摩國  
船改

梁古樹門

當己 五十三年

八丈島

御役人衆中

右之通り口書取置申候

一無人島より乘り来りル小船並ニ諸道具荷物改之

小船吉艘

船五棹

是ハ無人島ニて寄り木を拾ひ立候

内四棹ハ大坂船より取揚々置申候棹並ニ薩分

船より取上々置申候

網斗房

櫓吉舟

是ハ月島にて木の皮にて打立て申共ハ月島

にて寄り木を以て縫立て申候

弥帆柱吉舟

細物斗房

是、全島にて寄り木を以て拵へ枝

是、全島にて木皮にて打立申枝

水樽四ツ

是、全島にて寄り木にて拵枝

メ

七品船道具之令

鋸

二枚

鋸

壹枚

鑿

三枚

斧

二枚

山刀庖丁

壹枚

曲りる柄

壹枚

やちり折ぎ

二ツ

股差

壹腰

但し拵ふし長造尺位

右八品左國地より持来之令取上ヶ置候品

鉄鎚

壹枚

釘鑿

壹本

釘メ

壹本

釘抜

壹枚

庖丁

壹枚

毛み鋸

壹本

墨盡

右七品ハ無人島にて打立候品

以上小船並ニ諸道具之分々江戸表へ伺之上可取計旨申候哉

帆四反

島之干物三俵

是ハ三艘乗リ之者衣類無人島子ニ懸立積品ニ付改め之上当島ニ石綿ニお返し衣類ニ有破損

是ハ三艘乗リ船中之飯料無人島より持来リトニ付当島子ニ改め之上乗組之者へお返し申候

水筒徳ノ字物壹ツ

船頭 栄右衛門分

白綿 絆 壹ツ

祝仁 甚右衛門分

古日

水之 重次郎分

古日

炊 八五郎分

右衣類改め之上船頭水筒一古候哉

一古之者共高己七月八日ハ大島ニ着候ニ付日ヨリ米着麥荒麦苗島遍苗中無人ニ付飯料として書面之通に候し今抱以多し候

右之船頭水筒圖地へお授り候船量之ニ付今般島島便取を以てお送り根倉肥前守御役所へ差出し其写着之上内差圖可有之候以候為心持申達候以上

八丈島

名主

小丸衛門守

同

助之丞 下

曰

善太夫

出國二月迄下

曰

三郎右衛門 下

曰

秀右衛門 下

即船預、立会役兼

服部源五郎 下

神主地役兼帶

奥山丸京 下

地役人

兼地左平治 下

曰

兼地左内 下

曰

兼地恒七 下

平豐後守様

序役人衆中



我附藤大島の嶽百里東小一島何里大陽の出波によ  
て見老をばふかに白雲の波間子遊りて極ふさる何里  
あまを其の志ふしなるふ人とむかしより島夷乃以ふ  
かるさ老と其島をいふに名つくるやまた其の島岨に  
人の何里やかしや詳かふさまき寛政の初かりけむ藤  
府の士田中伊兵衛かふその所る死何りて大島に溺せ  
かまし此人えより膽勇の城乃あかりける島のみむの  
しかたりを写て以て其島を切里とりて君子奉るその  
功をもてかの老の罪をたふか己人として以島乃酋長柄  
結間切の藤代を以へるをかこふひ健平を率ひ食糧兵  
船を乃せて洪涛を志れきてをしぼるか百里許りにし  
て果して一島をたたりとらんとするか岩高く岸え浪

何り人して船よき在家に便かし嶋をめぐり至るに人  
栖む地とも思ハきに兎角出る極北風烈しく吹出し島  
根を取も佐し標ひ流る、程に日数経て琉球の小島に  
標ひ着たり波洪濤に沸きてや以後まか、百企七那可  
りしと家人押せるに伊兵衛可なりし嶋を以丹子の舟  
子片可標ひ着たし島も一ヶ地なりけんし此の季の  
事を嫌忌生へきぬしかきとも元より人に示さ書かす  
祓といせりに施しをく事に家人急志不す

醉山翁問  
松兵二番

無人島話

天明七丁未年十一月に戸川出帆翌申年正月二月  
の頃無人島に漂着寛政九丁巳年六月八日無人  
島乗り出し日月十三日青々島へ着帆同七月八  
日妻々嶋より八丈島へ後悔以年十月の末詔江  
下へ帰帆

島物語

島に無人島なり物語を松多樹すす所肌里草より採しと  
むるを醉山翁なり寛政十年年除生の末もより草庵の  
扉成叩くも何至入り来るをみればむくつ者如いなる  
男かり以つたぬ人等と問ひければ已甚な事言来とて飛  
前の船院なるか標流して無人島に在るかと数年昔の

先恙なく江戸へ帰里着きたるなり其の消息を指余をり  
見ぬへといふ亦左免つししく免てたき人也此より其  
たへ入ぬへと空上子引を我に船戻かり礼義を知り免  
しぬへと何人々をいにて空したり何てお老家好む家乃  
事かりありくと我ぬへ波島の事を向ひも去へし聞せる  
一といえ、いせ、くつあきたる顔付かり何て以相合情  
可吐しを左船を大坂舟かり江戸に在る時は代官山中殿  
差圖よて仙臺荒懐子馬用米成積よ集るへしと何利々を  
左十一人よて天明七年十一月二十七日江戸川を出帆  
しておぬ三崎よて風待して十二月八日順風を去り九十  
三里の灘を去り世帯懐子大ぼりの鼻にて像：風変り大  
暴風雨よかり大洋中に漂懐して各角も分りなき橋を

代て各誓を拂ひ神佛を祈りて風よまみせて飛り去り  
又を承回とよ月日もさたよ子分りなきとも大極五十日  
をよりなり

は漂流五十日斗りの男んそ極月大雲の以なる子堪か  
くたやうか承果気よ何ひし事有ぬれ、熱帯の地よ至  
りしよやまより綿律風よ何ひ無人島よ至りしハ六十  
日はよりの内と程り申川  
まや飯米も乏しくおきを左粥を食、至てしのきたり又た  
船をもいたく換し若るやへ船底子何かの入る事頼りぬ  
此も各力を出して是を返むかく在る内よ島山も見掛多  
れを皆、懐ひ船をるの島よ近地帯よ至て是承子承さく  
して浪阿がし船を承に廻き使りも承く亦た承よ承るへ

きやうもあし礎をれぬしたをとも悔れんして礎きかに  
小船をお放して釜鍋火の道具を入て各残りに是も糸を  
みしく冠越く浪静なる所とたつ祢松て陸子登りけけか  
ゝる難處かきを只上陸を専一して船中の物を揚るに  
以と悔阿くはぬるかへり見るに舟舩ハ南に流れて忽ち  
左廂を見失ふ危殆なるゆゑ小船をり方次第にかりぬ  
さて上陸して辛き余を助る里松をとも食物もなく飲水  
もなし礎邊の貝殻や拾ひ売と礎き身を激に洗て水を  
食とし暑し鳴るゆゑ食物や阿るらん尋ねて見るべしと  
て山上に登らんと思ふも薄雲の難處五六尺子生ひ忘けり  
て道もかへやうくよして山の頂上登りて向ふの礎邊を  
見おぼしたを人の形ちしぬるか老人り立形たり片て

左人地住むを彼をのよ多つ祢阿日人と思ひ山を下り  
んと此るも前の如く陸もなし草を分けつゝからふして  
山を下り彼礎邊に至りみきを髪思く目の色赤く絶くの  
古木本跡と原の系にて結ひ成たるを着たりいふある人  
等と尋ね尋るも母も尋るもなす海にて暮ていふやう我  
を土佐正鏡郡赤田浦の儀七ゝ舟子屋敷四人系りよて天  
明丑巳年二月難風より阿ひ漂流して出のし後よいたり今  
年まで三年を送る向に残り三人原右エ門長のまの左病  
死して我を人活き残りし名を長平といふものなるよし  
と云ふは我等も各名を告げけり交際者の始末を語りけり  
と且子孫をむとひて忘えしをおもひてありしかさ  
て尋るやう山の島に住む人も阿るや且ハ我思の船或ハ

好むの船かとの舟駕りすふし悔か里やと問へも長平答へて之を云ふに及ばし外玉の船とても多へて来る事かし怒め止は島を無人島とて人の住居なきのみならず食物も少く水も乏し只魚鳥を捕へてくらひ天水も待つてのむより外を余を保つ願きてたてぬし亦の島に漂着してを再びか玉に帰る魚を便りも乏し以多つと子死に果るをまつ斗りかりとてふを聞て我言やうくよして此所より上陸して平き食<sup>命</sup>をたせり里中の悦びよて差に阿ふをい々もしてか玉に返る時節も阿ふ「やと思ひ吾しよ今長平の話を写て各船もぬけカも落て候歎け及い布り此長平老人にかりて火を絶したるを火食たる事阿た日迄奥島の肉を生にて食し布れも年月を経て眼

中朱を焚く如く赤く焼きたるに木を焼くと同様の後を煮焼し多る肉を食しけきを自然と赤し去りて平人の肉とき眼中にありたる式時木を焼く鳥の肉を生きて食しみるよひもよしても喰はる、そのに阿ふに長平は必死とおとい極て食し布れ先にや木を燂美味として余を焼きたり我を驚かすも窮乏るまに余もつかあふ、そのにや哀きあると、木を食す其後、長平も一所に坐りて十人にて斗間四方をりたる岩穴を穿て木を食し我と我を後に三四ヶ所に、皆岩穴を作りて人数に分て棲とせり食物も奥島と貝類のみなりかくて寛政元年十二月二十六日向細島より出帆せし際船中人島に着し翌戌年薩州志布志藩の船六人乗るが際着

しりまに各壇逢ふかり立て引揚げ解に入た承小道具を  
舟に取上り承に其内、舟船解もとも破舟して浪にと  
り去て行方を志くは六人のその秋岩穴に棲ひて島の根  
子をも詰り守せともは六人の穴に居居し暮り松多樹の同  
船の中兩人水船に遊ゆは食物の何しき故子也病氣身て死  
した里薩六人の中武人五五在正内承も同病にて死し  
た承今ハ三艘の船合十四人活き形か分へぬり

市長情長と東情飛吉為肉為三、物松金掃薩戸船よて  
四人八五節主次郎甚太東内常九東内木なり

以島の免之里式里さふり山何り方サ十七八丁東西おし  
但し東腹より峯三ツに分巻南にお通りて谷おつ何り長  
さ四五丁おの谷の内は穴あり深さ五間さふり幅四五間

南之方は曰し穴を何り狭し以つ巻を巻きて肉子入る  
事何たハ以殊に着莖生茂りて乃もなし四方樹岩岩高く  
浪何ふし大坑の時ハ大浪三四町程も山の禁に折揚る大  
此に依て岩穴の橋も五町許り山の頂を採ひぬり

以者とも穴若の中莖を背き下子莖の種をまき種て四  
方とも天井ともし又た種も七代へぬるよし

此地南海中に在て暖地なる故に常に硫黄の気有之焼け  
山なり岩石も赤りくくやける那巻を山に登り人と此る  
に岩岩をて空りか多し夫由互に穴若も人地を易くして  
久しくお持ちせし

此者共降中ニ若ハ時左船破水入り川内一登粒只是  
を扱むのこに精心を用ひぬる巻とも五斗りの内巻

人も類ふものありしる上陸して危難を逃去心氣あ  
くかり且つ此地飲食なく其上古ねへ帰るべき便りな  
まも歎き心氣ゆるみて暗嶮ひ死し者ありその外の  
もの共々昼に食を求むる爲めに終日殆どた巻夜は蓋  
を以て草鞋を作り其外船を作り道を作るために廿し  
も夏のたゆまざるものも生て帰りしとあり亦れを見  
れは人の養生は只此事と見へあり

亦の地高木ハさうにたし高き巻丈許りを限りとを九七  
五本の種数数少し焼岩あるなよ山水なし岩を穿ち天水  
と涌出たれとも焼石やへ早く涸れし此島の外二別二島  
山を見る事更々なし山上より遠く望みしれとも海山  
と覺しきもの見へる只四方漫々な蒼海あり在る乃内

吳船の使来するも又毎事をし難きを熱こくに甚し  
く岩焼て徒是にて歩けし難し冬に至りても霖雨降るに  
草木枯き雷と鳴きとも地意を分し雨を四時共に降る  
とも冬暑の比ハ早多し流し塩気甚しくハ夫の懶せ亦の  
島より塩気腐く日本島の懶なハ夫島よりもまた腐し  
此島の海岸に根の赤石あり日光に照を巻白く凝て烹  
爰に塩の赤く亦れを割り取て食料と食るに塩気甚た  
厚し月日の海面を出る時日本國より三四双倍大に見  
ゆる也亦れは洋中の濃気厚きを故なる一し亦の島にて  
月並日並を知る者三日月と満月を以て数へ知る斗り也  
月の大小由月を去りされは造ひ多しといへとも大概お  
して一年といふ事を定めしむり以島暖地なるか故子か

人数年存命したり若し豊國ありと一島七嶋々多しといふ  
ふたも阿る一しとかも有る世よふ無人島も実・六の  
島七さしていふよやあきより介子無人島といふ島存に  
や林子平々三風通覧の内國よよをを春々島の南百里  
に無人島阿り小笠原島とていふ

享保年中子倉小笠原侯公儀に成死有之南海と内に無  
人島阿り人数を甚し是を詮放せるとて小笠原兵部と  
いふ人を大将として人数百五十人をして島の板子も  
見て帰りしてあやまより此島を小笠原島といふ所の  
視の遠実不審是も享保年中伊勢白子のその無人島に  
漂流し帰玉の後ち右の者廿の佐古字に小笠原某とい  
ふ山師 公儀に召ひ出免と上巻のその、弟を主と

して其所の言頼者を集め船を他り糧米を載せ糸出せ  
島に風悪しくして伊豆の下田に舟廻りし者其内彼の  
無頼の者とも上陸して怪々悪事を爲しけきを以て  
立者不事な事を所て困り以ておれぬ捕あの人と  
下向阿る右の由を彼者とも傳え兼り風使をも探り出  
衆り出に其後、行身刻ふんとかり扱其預を小笠原何  
某に乃に考り所か、増次舟由一に公儀を馬を亡命以  
多し其年月を證て姓名を改め三浦何某と称しに所系  
橋白奥を友に徑若に其も其時分出會をし事阿里し  
と久安事各を言れたり扱亦そ小笠原崎といふと  
かん

其國を見せ已島の破も大にして喬木多く層島數十阿る



如くに施せしに今少く所によき大海中の孤島にして  
外に島嶼なし水舎傍り帰帆の時順風にて昼夜六日走り  
て春々島に至るといふ事には就て予云つるも昼夜走り  
不悔治の里数に以て程あるを思しや汝も船系を走る海路  
の遠近大概に知るを思しと云ふに凡そ五六百里を有る  
一しと云つ六日之間に外に島山ありと見付けてありや  
云へば島山と云ふに見たる事なしと云ふ此より考  
へ見るに始め漂流五十日斗の内之餘の島山も船を走ら  
せ終にありの量人島に在り漂着したるや此島の山上より  
望み見事にかみ島ありとも云へば此島より五十里  
内、島山あり事未速かし漂流中にも島山にも島山を見  
りけは帰路あるの間にも余の島を又た不事をしき以つ

てハ夫島の南に無人島ありと世の人衆に不聞也此島は  
事秘ひあるへし林子平の聞も傳聞のみにて施し  
れは実地を踏きたる正統ともいひ難く承へし水舎傍り  
夫も老とも彼島より不事十年正しくいふるに遠ひあり  
水ハ予ハおの男の説よりまほしく思ひ悔殊に悔路の  
百里を順風にて一日に巧く事なりといふは舟人の老  
信にも聞つるを春々島の南百里といふは虚説の  
台命を蒙りて無人島にいたりし時島の遠近く船を寄せ  
ぬれとも老々く悔荒くして上陸をへきやうもなし其中  
に大暴風吹起て又た沖に漂流し終に土がみ着たる事  
予も正しく知る所あり今ね兵衛の語によき此島は毎

人鳥として家たぶに違ひ何るまじ橋とあるに是れり扱  
前に云ふ如く此島の谷は岩穴をツツり人の住居し多  
家と見へて鍋釜鉄物の腐れたるを踏ぬり人成華を  
る家をツツり書付志ある板を板有出に付たる方を年を  
経ておぬれを文字とせたる如くは昔板を遠海の船あり  
壹枚を元文三年二月漂着江戶塩所善八船一艘其舟の文  
字は朽て又へに亦の島に白鳥多く有り日本の白鳥より  
は猶ほ大廿り兩翼成張まを七八尺斗りも躡有り九月に  
来り翌年五月に到るまを何方へ行く欲造羽も若くは  
彼の谷の肉も多く集り飛て爰に卵を産て雛成育て五月  
に到るまをともには行へ行く事毎か已ふ事なし

此島の是羽等に木札を付けかゝる島はかゝる者

よしを書して放ちなせしや本國知事人の身も至  
りかんとめ意にて凡そ四十羽をかりも放ちぬりあま  
を薩戸船漂ひ来てかめ船より軍墨を拾たる後ちの事  
ありとそかゝるは此の人情の切なる處よりして彼の  
漢氏も厚書の事と曰輒の免免しといままし

卵の大き茄子程かり此島無人なるかゆを爰に來て卵  
を生たるし青々島にも稀に來る名を白ふといふと  
り始め人成馬を捕へるよたや此か至しか後子も  
れて人をよせに逃るこを速かり逃ひ回して漸く捕へし  
たり十余年の間命をつかたしは此島の肉よりかある  
かし凡そ千余羽も殺しぬらん肉を食しし卵を食しし油  
を焼とせし此鳥形かりと十四人の毛の以て古

へ帰る事をたんや此肉味良しして丁鴨におとら調程  
を焼くせむ豚かすへし煮て日々食したるも味ひよ  
り此となり風が若れと飛事知らん凡に捕て飛り此大鳥  
を凡を待て飛をのとみへたり樹に棲之奥を死り喰ふ採  
め日を飛事知らざるを較奥の事を知つて是を口にてく  
已へ悔底に引込と終に較の食物と此の事を又是は不仁  
事とおもへとも我輩の殺生よりさう子不仁とはおもは  
に五月より九月迄は此鳥がし乾肉を貯へ其留は奥を  
釣て食物とせし飛り此鳥の外は鷲目白と手中有る里馬鴨  
と年子寄て授り来るとも稀なり燕八年、替りに来る鳥  
は始め稀なりしか後子に外より授り来るともや又た出  
地にて育しりふにや甚く多く飛りたり岩穴に来りて食

物を竊にとり後ハ防ぎ兼ねたる不となり蠅蚊ハ夥か  
て蠅ハ食物に依き蚊ハ岩穴に有て人子身く此まハ防  
くに便利なき斗りよて常免悔事ありし

焚地ある所に四季共に蚊蠅有りて松別難休那りしと  
かこ坊

奥子に依し奥を黒く飛鯛に似て壹尺三寸より七八寸  
まで有り本玉にて見馴れぬ奥なり較大小有り本玉か  
る事有し釣り仕る事ありか多し赤奥ハ木圍のかさ  
に似たり無ハ多く有るとも道具かけきと捕る所と何  
已に式三疋取て潮子煮て食し多不事有り 魚を食ふ事  
伊豆玉人の話  
子て食料と生る 鯨はあめ島の沖を通る事あり那り奥も  
事を聞きたり 始をよ釣きたれとも後子に糸釣針のふと杞子馬をて

得る事難し一日に式三枚能く釣れて六七枚七得る事  
あり其の内を各濱辺に出て釣せたる、事あり其の多し  
子依て死分して食料と成に鮭を鳥肉貝類をも用ふ十  
四人の毛の日に換獵に出るとも老人を穴中に残して火  
のあしをたして火を絶やさぬやうにし釣に出ても得るの  
あき時を言に及いて棲に帰るに心細く力も衰ふものな  
り

釣に出るにも岩山を急一日に学歴かつ、用ふる甘り  
其の学歴も董の糸をもて作りぬれは早く破き易しと  
いふ

貝を採るを見て碓辺に下り於ふひの貝志多、の貝あし  
いふ子貝ありあきを食料と成東の碓近人に木立あり此

木を見ふに本圃にて一ツさ北と云ふ木に似多り此の木  
の皮を剥き取りて水子で製し練糸の糸とくは志て糸の  
用になしたる言さ七八尺を限りと云ふの處に是より高  
き木なし葉更の木あり実をちて食しちとち移にも絶  
て那し大葉何葉を採て烟草子代へ用由

多葉粉といふし、かき毛の餅を扱ふあしも阿下に無  
可り人に大葉を代へ用ひ、ち人生止むあしと得さる  
そのあるか

朝鳥草多し獸をたし蛇の毒をへてたし虫類もたし岩  
穴の前に蛇をかり貝壳を焼きて白灰となし塗り堅めて  
天水を貯へ立て飲水と成早打候し時水涸て難俵せし  
事交になり衣靴を船中にて着たる俵にて上階したるを

外に衣籠きつてもかし此島陸地なるる故に若皆木綿の綿  
律きつ用ひしおとなり後方にむ被木の皮の糸を以て白  
鳥の羽を籠りて袖かし羽織のやうに捲へ着し多量に  
に制りて左殊に暖なるものなり笠を蓑の袖と鳥の羽を  
つき合せて笠となし笠を折れ左天子左歩むる事叶  
ハに後子左おれも切者となりて中々奇廉子出来あり左  
島の弓五穀を食せさるる右みだ平生呼吸短気して彼鳥  
と追廻しおとせに甚切れして思ふ根に走ら事非に  
江戸に帰着して穀粒を食しおれも彼甚切いつとなくと  
れて今を平日に吳女怪事なしと云ふ聽して標流の内赤  
小豆餅を強へ多る夢を見る時其舟必在無難なりとい  
ふ事船乗り共いひ那ふ已したるおとめよし或る船中兵  
立しハ伊勢の

擲故にて赤小豆餅の振舞に呼き多る夢を見しか是云吉  
夢よてや何り々人食ち全して故に帰る事を得たりと  
語りき標流の内赤小豆餅を強へ多る夢を見る時其舟必在無難なりとい  
立しハ伊勢の

太神宮と讃岐の金毘羅なり神明の加護何しと覺へて  
もこの危難と逃去る事にて本國に帰ることを得ぬ事  
といふ處し三艘の舟り此の左島之内に七人病死し  
たるを若墓海を志つらひ石碑を建て俗名を彫井主小麓  
舟の船より取上げ多量大工道具鋸杵鉋杵杖鑿三挺斧  
斗挺曲り尺巻舟山刀庵丁若志挺鑪の柄式ツ服差壹腰以  
上の取何りりれも若身命お終し若るは我等今かく此島  
に何つて殺生を以て存命せよやうかれと何こハ七人の

ぬくに程らんお望心定なりとも艱難辛苦生るかゝら  
い等の及具なる所を幸いぬれ今よりして碇迎の寄木を  
拾ひてなりとも右刀を存せて小舟を舟立て運を天に任  
せて乗出し再いかなる子孫に父母妻子再會せんハ大幸也  
ふハや不運にして悔意の水層と程らんも亦の島に在て  
朽果るも同じ事なり右次漸如何といふにみちたなり悟  
て可ひかき委ぬの今の所里さす思ひ残は事さうよなし  
と一統に同心し乃れも夫より屋敷船を仕立承合せら  
りなり釘なるれを舟も出来に幸ひ休七ハ必元又て隣家  
に銀治て朝夕見守した家事ぬきまにかみもして素蓑  
を仕立免承へしとして夫より寄木を拾ひて仕立ぬるに可  
也にお来たたり石を鉄鍬にし舟を鋸になして不足なる通

具釘板造板釘ノ造平鑿造板鉄鍬造板もみ鍬造平鑿壺  
一ツ出来たりおれらも何れも鉄にてつく是より換  
獵の際にも碇迎に出て木を拾ひらるに船底にも来るへ  
き板造板寄り来れり天の巧たへと取揚けまぬく寄木を  
集免ける

初め々懐により人承もの所と心もなかりしか舟を作  
るへきと心得しより後も見取物おとに月にぬりしは  
も神佛の助ありと申とも実を意を用ゆると用ひは  
ふとの別からんかし  
片れと船の仕立方を知らるものを人もあし先つ着に  
て舟を仕立造又て造り試るなり亦も舟舟として長さ  
三尺斗りの舟を舟立て試ぬり

船めおととも子て底板をきとひひ縁通りを柵といふ  
其柵斗りも四十枚を用ふ皆寄木也といふ

板船を仕立つへき場所を見立山海にて廿しつ、柵へ始  
まとも寄木を當てよさる事ゆへ急に出来人も思もれ  
に三年かゝりやりくにして牛船しぬ長さ六呷幅九尺お  
り帆柱も寄木を纏て立構もより木を集免て仕立帆、上  
際し又各時各着したる木縁糸子流おとの何里しを裏表  
を例の木皮の糸よて纏ひ纏まて出来たり

ハ大島に着して此帆を解き衣靴に當して着したり帆  
ハ木縁の中四反あり

此帆おとの縫ひ針七ぬへおにて扱へた此とも針の玉控  
を何くるよ殊の外勞したる事なりやりくにて針も出来て

例の羽衣羽笠船の帆おとをさおの針にて縫ひたるるり  
さて船を仕立又各場所より横切まての写岩石をくして  
船を下々難しまより岩か、置て岩石を切刻り式を片付  
て道を平よ左家事故日を強てお巻も切て出来たり右之  
手本船に島の板子兼ニ食お飲水の事よりして小舟を打  
立出帆の次おまてを委しく書付て彼岩穴の内に残し置  
此後懐着のせ之便りにし取まへきかとの心を用心し各  
なり右の船仕立も調ひおれともしまた梅に浮めて試み  
され左源の目を見立て島のぬくりを糸り廻して試ける  
に糸り心もよし走る舟も掃なくみへおれを是よて気を  
ひもおしは止ハ日和見定免喉尻を付て出帆をへしと右  
悦ひ何へり船中にて飲水を行へるに置おおし桶を仕立

人と此れとも船に在り作れり是れ以て可人と云ふ事能  
又は久敷思ひ勞免るに云ふは一も作事不疎に當り  
来たる亦老を寔に天の所は一も不神明の加護能ひ成し  
と此れを破りてたかとかし桶四つを格へ天水をたぐ已  
へて船中の飲料とかしたり帆綱其外繩の乾く木皮の糸  
を以て製成方角を定むるに是より西北を向ひて走ら  
るは極て舟玉の地子いぬるへし南風を以て順風として  
出立へしと待々系に日和に南風を走らぬ時亦老来  
とて舟玉を棄り神佛を祈念して出帆は昼中八里程も走  
りぬると覺しきに無人島も云はれ其舟子左程は島山も  
好し只瓜にまかせて走らせらるる松島場より云ふ島に  
在て人方とて人も亦より覺悟の事あり又と一系の船に

来りて方角も分らぬ大怖に棄り出に是まゝ前にいふ  
通り必死の決断に何ふさ此も争か船中に安坐して陸地  
に至る事を待たぬ人も亦の云つ左所此も死地なれとも舟  
行も大業何れも生地を惜ふ事も何れも各船に乗りて走  
らせらるるも尤も心後なり此れとも扁舟に乘して大洋中  
にのぞむ時其怪あり、初堪へかゝあるへきに缺くも  
くも乗得て舟を出し捨るもめり船といへば善へて云ふ  
やう夫の船に在りぬ人も亦の云つ左所此も死地なれとも舟  
何れも十四人の者共皆舟を以て業としたるもの共と  
かりぬれ此危に乘する事も出来たりといふや何れ  
ぬし出て舟も破れにて危難より走らせらるるに五日  
の夕方遠く島山見え初て何れも力尽きて島を當てに走



子所翌六、の昼四、時辰彼島に暑那止上陸して尋るに  
春々島より八丈島の属崎なりと云ふ年月を尋れを寛政  
九巳年六月十三日といふ島の役人出書にて色々世話い  
たされし船を濱揚げ以多し我等はは女抱を以て此島に  
通前無人島を出し六月八日なり翌十四日大暴風  
雨ふり舟行今一日逐かりせを我くおひく梅底の水層  
とかるべきと神仙の加護ありたりといとたふとくとか  
たしけち人も思ひ多りかて七月八日日和よりれを  
帆を預ひしに水主兩人乗り増し都合拾六人乗船て七月  
八日朝五、時余り出せ頃風にて同日八、時半時八丈島八  
重根涼へ着岸を春々島も近年山焼て人家も多し焼失し  
た里焼け跡り多し人家九軒ありその地五穀をなし里芋

を煮て食料とせざる者あり八丈島まで海上三十六里あり  
といへり是より八丈島に在る事八十餘り此等々  
官より米麦を渡り通前中種との味を抱下され多し教  
年の写髪盤なども生ひ次方此もは役所に預ひ髪月代  
預し交の金を預ひ布札もは免ありて始めてかきを結ひ  
月代を刺り日本人乃染に成毎家嫁しさ學のやうにのこ  
思ハをて炭染を事交に有里八丈島より江戸への通船  
多しと云ふ事なる内迄年に式交ありその島の織物を  
積てかくるあり此は役船出帆の席に標旗人とも一考に  
法か已まふ、有れとい便船取事まで通るせよとあり此  
島にて西役人已れ、十四人のそのを召れ各標旗在島并  
帰帆の始末を尋り、年々申上るれを口書成認免有之

我其後便船子て八丈島出帆江戸到着と後根巻肥前侯の  
御使所に差送与れ肥前侯に召れ直に水陸海大掛若勝手  
次子帰玉被 作付哉

八丈島出帆の日と江戸へ着て不月を三艘之口書とて  
何日せ以不事兄へに予七写柄したり八丈島より十余  
日逗留せと以ひ又之伊豆下田に久我丸指せといひ志  
す此丸九月始めより八丈島を出帆して十月よりて江  
戸へ着せと又へ多り他日聞て之を書か不盡し

本所の條を張り紙にて枚田玄伯の本書に送漏した  
るも増補したるなり他日浄書の付本又中子書まか  
ふへし 愚日初て無人島に漂着せし日を忘るるに

天明七年 何月ヲ脱スルカ 二十七日相分三寄を出帆一丈極五六

十日の既に無人島に着せしなりを皇申年の二月の  
既なるへし其れまた益くて有るへりさるる事  
なりよるへく書記せし

跋

醉山翁楸口氏齋來一書使余題其後披而閱之乃往年歸自無人島漂民松兵衛者之語也而翁之所記也語曰天地之性人為貴人有天命命屬于食故為重通之莫若貨故貨為次食貨之轉漕莫若船然乘舟不得其通則有覆沒漂蕩之患矣夫食貨者農夫累一年之力工人積于日之功粉粒鉅銖無不膏油筋力焉然今一旦播諸無底使所責者葬于魚腹豈不痛悲哉吾邦衰海之城也海船之用最廣矣自古海船之出而不歸者幾何也吁嗟負海之國送漕之吏可不以是為念哉夫平常屬目於所見而不留念於所聞故雖通聞之亦不以為憂謂不可若之何矣豈不無所用心之已甚矣哉吾聞西洋有航海之法若遭颶則隨風不逆縱船所適於其所止處晝景日晷夜觀

極星以知船之所止是其分海隅之所紀是在其方然後待風  
至乎所欲過之國百無遺策今夫船師不知航海之法若遭顛  
懼其放流失度程徒望陸循洪奔蛇迂風故船暗礁或被洪濤  
幸不為齏粉亦剪髮折楫拱手至乎無何有之鄉茫乎無由得  
針路矣吁嗟痛而悲哉負海之國送漕之吏留意于斯審舟楫  
之製曉操舶之術庶乎鮮覆沒蕩漂之患矣余今讀斯記深有  
感矣翁之為斯記也蓋亦有感而然乎則有同於余心者矣因  
執前言以為跋

寬政戊午仲夏、月

福山太白方識

跋

二百年來本邦海舶漂到異域者蓋不鮮矣於是乎浙江福建  
及呂宋安南朝鮮韃靼魯西亞蝦夷等諸夷有待我漂客寒者  
衣之飢者食之居處器用愛養略備而後以便其送還于

日本也嗚乎四海一家不亦快乎有之哉記其漂客支跡昏亦  
不為不多予好閱之而舟子所記俗吏所記雖可以供談竒之  
場不可以備有識之觀亦天文地理風土人物且以窺其一斑  
也若夫漂客在異域雖險阻艱難備嘗各國保護不乏衣食則  
待三四年若五六年而還今松兵衛等到遠島共此不同曾無  
君人以巖穴為家又無穀種以食為食草衣羽裳不足以掩體  
雨水露滴不足以潤口如此者十年于茲矣既而計之所窮造  
小舟度大洋幸而海若不驕風伯不震得皆全命而還豈不竒

予予聞松兵衛之話逐一記之者不為天文地理風土人物人之處世誰不嘗艱難險阻而如彼者未聞有之雖天不亡人知統命亦有術矣讀此記者可戰兢而不思之乎

寛政戊午夏五月

醉山淳美識

此施左隣舎を忍山が所負ぬしもたりし代傳てうつしつう々皆きに松免おきし世人崎の施中に合装を去し享保の年伊勢白子船の施元文三年江戸番八船の施又遠か船の施年月詳からに詳まゝに彼所集の事を奉して彼の島に接るに風浪子何ふて上陸せる事を始て出帆し漂ひし施おとせ世の人を元志とさきまおきりをもたきくにおめけてともひひとつとしておかせやと云ふとたよりおきそいらとかちある見やむおとともめかふる施を見むらとあらたかきへてあらにかひ舟あてよ

天保乙未の七月星左のち小一 魚一 寸

